

第6節 その他構内の立会調査

1 湯田宿舎給水管改修に伴う立会調査

調査地区 山口市湯田温泉六丁目8-29 湯田職員宿舎構内

調査期間 11月11・15・19・21日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約35m²

調査結果 工事は、宿舎東半部における給水管の布設替えに伴い、A～C棟間を幅50cm、深さ95～180cmにわたって掘削するものである。なお、各宿舎棟建築時に明らかに削平を受けている地域は調査対象から除外し、管路長にして約70mを実際に立会調査した。

各管路内とも現地表から65～95cm下位に旧耕作土が残存し、その下には厚さ20～30cmの灰黄色粘土が堆積する。掘削深度の深いC棟付近でそれ以下の堆積層を観察したところ、現地表から約2mまでの掘削で、上位から黒灰色粘土、青(緑)灰色粘土が堆積していた。黒灰色粘土は厚さ20～30cmで、灰黄色粘土同様、遺物は包含していない。青(緑)灰色粘土は地山で、現地表から1.2～1.5mで上面が検出される。また、径約4.5cm、現存長約20cmの木杭2本が黒灰色粘土から打ち込まれていたが、出土遺物がないため時期は不明である。

なお、吉敷・湯田付近の小字名には「坪」の名が残り、古代の条理制が施行された地域と考えられている。湯田宿舎の敷地付近にも条里地割が存在したことが考えられるが、今回の調査では畦畔・水路等の条里遺構は検出されていない。(河村)

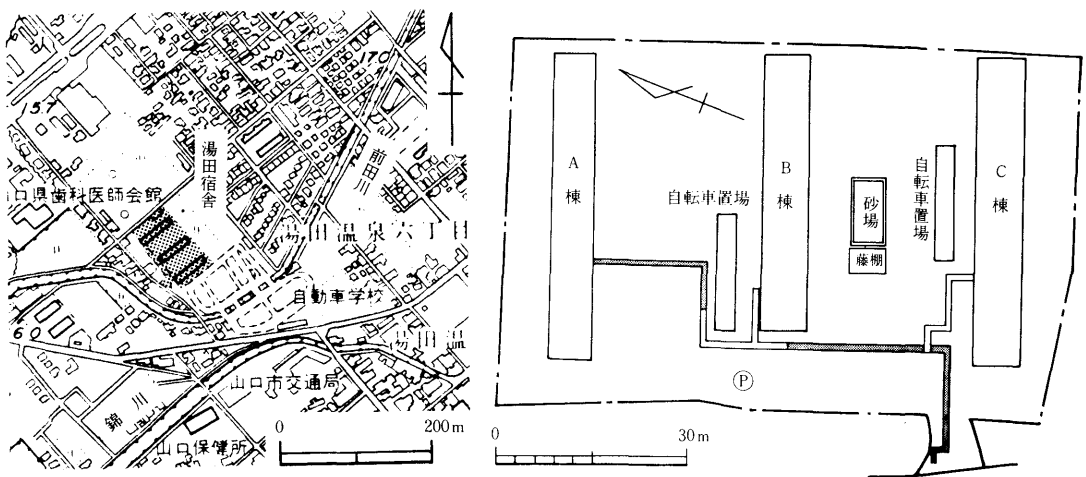


Fig. 58 調査区位置図

2 経済学部職員宿舎下水管改修に伴う立会調査

調査地区 山口市水の上町 6-9 経済学部 2号宿舎構内,
同 旭通り二丁目 3-32 同 6号宿舎構内

調査期間 昭和62年 3月14日 (6号宿舎)、同 3月19日 (2号宿舎)

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 2号宿舎 約7㎡、6号宿舎 約1㎡

調査結果 本学の職員宿舎は山口市内各所に分散している。今回は、そのうちの一つである経済学部2号・6号各宿舎において、下水管改修に伴い立会調査を行なった。以下、宿舎ごとに分けて記述する。

〈2号宿舎〉

2号宿舎は、山口盆地の北西部、独立丘陵状の香山(標高約95m)の西縁部付近に立地する。行政上山口市水の上町に所在し、西には一ノ坂川が盆地に流れ込んできている。

工事による掘削は、第1地点で現地表から80cm、第2～4地点で50cmまでであったが、各地点とも工事掘削深度内は黄褐色の山土を主体とした埋め土であった。しかし、第4地点では埋め土中から丸瓦を検出した。

出土遺物 (Fig. 60, PL. 16)

丸瓦の破片。側面の一部が残存するが、凸凹両面とも風化が著しい。凸面には、側面に平行および直行する刷毛目が施され、胎土は須恵質で砂粒を多く含み軟質である。室町時代を遡る可能性がある。

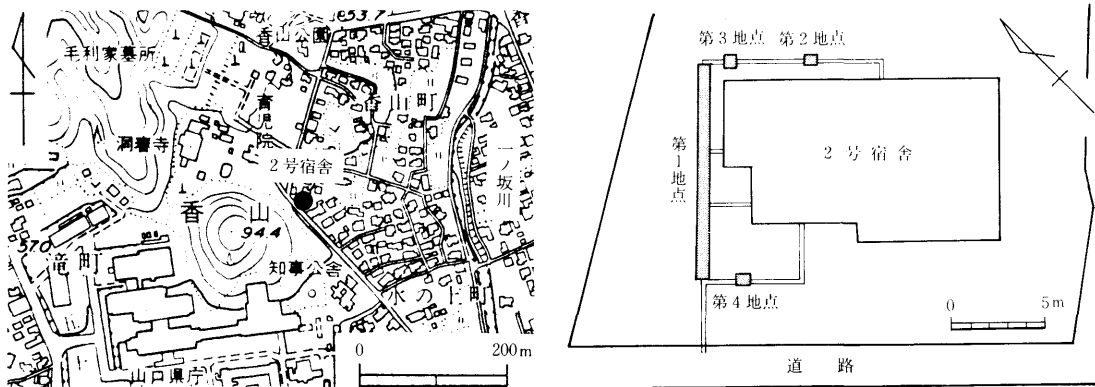


Fig. 59 調査区位置図 (2号宿舎)

2号宿舎のすぐ北側にある洞春寺の山門は、室町時代の応永11年(1404年)、大内盛見によってこの地に創建された国清寺に関連する遺構かと考えられている。なお、現在のところ国清寺に関する考古学的資料は全くなく、今回出土した丸瓦が同寺に関係するものかどうか明らかでない。

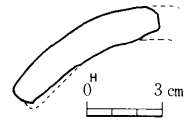


Fig. 60 2号宿舎出土遺物実測図

〈6号宿舎〉

6号宿舎は、行政上、山口市旭通りに所在する。一ノ坂川が樅野川へ合流する付近の一ノ坂川下流の右岸に位置し、一ノ坂川が形成した扇状地の扇端部付近に立地する。

山口盆地の遺跡立地は、その大半が河川流域の丘陵上で、盆地最大の扇状地である一ノ坂川扇状地に立地する遺跡はこれまでほとんど知られていない。わずかに扇中央部に、弥生

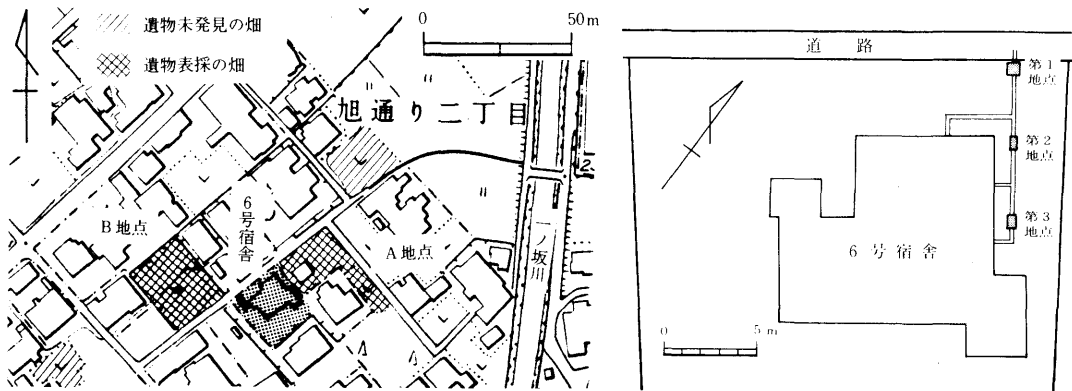
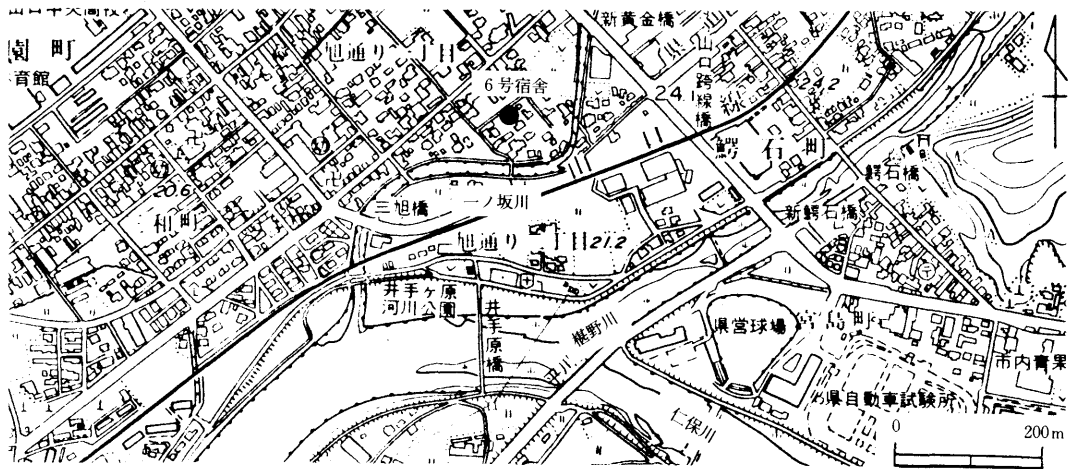


Fig. 61 調査区位置図 (6号宿舎)

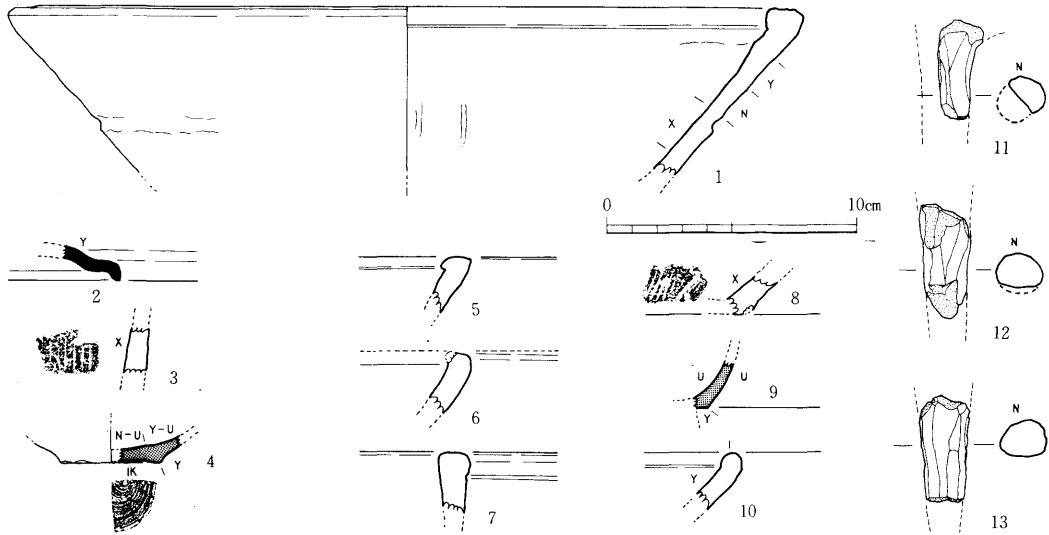


Fig. 62 6号宿舍出土遺物および周辺畑地採集遺物実測図（土器）

土器とともに縄文時代晩期の土器を出土した松柄遺跡^{まつがら}が所在するにすぎない。遺物は地表²⁾下1mに堆積する砂礫層からの出土であり、二次堆積の可能性が高いとされている。

今回の調査は、布設管路内で3地点を選定し、土層の堆積状況を観察したものである。各地点とも、工事による掘削深度である現地表から50cmまでは埋め土（攪乱土）であったが、工事地域の北端部にあたる第1地点では、埋め土中から土師質土器が出土した。

なお調査期間中、周辺に存在する5枚の畑地で表面採集を試みた。その結果、今回の調査地域の東および北西に隣接する2枚の畑地で、須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器および剥片の散布が認められた。以下、工事の際出土した遺物とあわせ紹介する。

出土遺物（Fig. 62-1, PL. 17）

土師質土器の播鉢。口縁端部の内側に断面三角形の突帯を貼り付け、内側へ突出させる。剥落が著しいが、体部内面にわずかに楕歯状工具による条線が認められる。

採集遺物（Fig. 62-2～13, Fig. 63, PL. 16・17）

A地点の畑地採集遺物（Fig. 62-2～4）

2は須恵器蓋坯の坏蓋で、体部はあまり屈曲することなく鳥嘴状の口縁部にいたり、端部は丸くおさめる。内外面とも横ナデ仕上げ。3は瓦質土器播鉢で、内面に少なくとも6条の条線が施される。4は陶器小皿で、底部は回転糸切り放し。なお、小片のため図示しなかった残りの採集資料は、すべての土師質土器と瓦質土器に限定される。

B地点の畑地採集遺物
(Fig. 62-5~13, Fig. 63)

Fig. 62は土器。5~8は瓦質土器で、5・6は鍋ないしは播鉢と思われ、5は口縁端部を内側へ丸く折り曲げる。

7は甕で、外面にヘラによる

削り出しを行ない、口縁端部はわずかに肥厚する。8は播鉢の底部付近で、内面に少なくとも6条の条線を施す。5~8とも風化著しく調整不明。9は磁器塊で、高台付近は露胎である。10~13は土師質土器。10は鍋で、口縁端部をわずかに内側に巻き込む。内面横ナデ仕上げ。11~13は鼎の脚部で、体部付近のもの(11)と脚裾部に近いもの(12・13)とがある。いずれも指圧による整形後、ナデで仕上げを施す。他に、図示しなかったが土師質土器・須恵質土器・瓦質土器・陶器がある。

Fig. 63は石器。1は姫島産黒曜石製の縦長剥片。背面は左側縁上半部付近を除いたほぼ全面に自然面を残す。腹面は剥落が著しく、上端部の剥落によって打点・打瘤とも消失している。2は水晶製の剥片。背面は不定方向からの加撃による剥離面によって形成されており、打面の一定しない石核から剥離されたものと考えられる。腹面は主要剥離面で打瘤を残すが、背面上端部の剥落によって打点消失している。

以下、小片のため詳細な時期比定は困難であるが、今回の調査で出土・採集した遺物の時期について考えてみる。A地点では、奈良時代の須恵器坏蓋、室町時代の播鉢などが採集された。主体は中世以降のものであるが、B地点に比べ量的には少ない。B地点では、縄文時代に遡る可能性のある剥片などやや古い様相をもつものもあるが、大半は室町時代後半頃に位置づけられるもので、宿舍敷地内で出土した遺物と時期的に大差ない。

また、A・B両地点以外の畑地では遺物が全く認められないことから、遺物の散布は、A・B両地点間の東西約50m、南北約100mの範囲内に集中しているものと考えられる。

今回出土・採集した遺物は、室町時代後半頃を中心とした、時期的にまとまりのあるものであった。また、播鉢・鍋・鼎を主体としており、中世村落通有の器種組成を示している。さらに、調査地点の埋め土には黄褐色粘土が多量に混入し、砂礫層が認められなかったことに留意したい。樫野川と仁保川との合流点付近から下流では、現在の樫野川の河道の兩岸一帯約600mの範囲内に旧河道がおさまるところが多いとされ、今回調査地区周辺³⁾

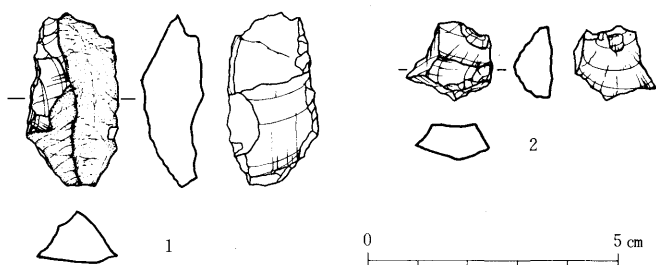


Fig. 63 6号宿舍周辺畑地採集遺物実測図(石器)

昭和61年度山口大学構内の立会調査

でも、樫野川の氾濫原は現在のところ確認されていない。

以上のことから、直接遺構・遺物包含層から遺物を検出してはいないものの、当該調査地域周辺に安定した遺構面が存在し、未周知の中世の遺構・遺物包含層が埋存している可能性が指摘できるにいった。

(河 村)

[注]

- 1) 山口市教育委員会「山口の文化財」(1982年)。国清寺は、常栄寺と名を改め、のち山口市宮野の地へ移って現在は雪舟庭として有名。この移転後の跡地に明治2年(1869年)、洞春寺が萩から移建されて、現在にいたる。山門は国清寺当時のものとされ、同じく室町時代の建築とされる観音堂とともに、国指定の重要文化財。
- 2) 前田耕次「原始・古代」(『山口市史』、山口市史編集委員会編、1982年)。
- 3) 三浦肇「自然」(『山口市史』、山口市史編集委員会編、1982年)。

Tab. 7 出土遺物および採集遺物観察表

法量()は現存値

No.	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
2号宿舎 第4地点埋土(Fig.60)							
—	丸瓦	—	(3.9)	器表—暗青灰色(5PB4/1) 器肉—灰白色(7.5Y8/2)	やや粗 4mm大の長石かなり含む。角閃石含む	不良	
6号宿舎 第1地点埋土(Fig.62)							
1	土師質土器 播鉢	31.8	(6.7)	外面—ぶい橙色(5YR7/3) 内面—灰白色(10YR8/2)	やや不良 3mm以下の石英・長石かなり含む	きわめて良好	
A地点の畑地採集(Fig.62)							
2	須恵器 坏蓋	—	(1.4)	外面—灰白色(N 7/0) 内面—青灰色(5B6/1)	良好 細砂ごく少量含む	良好	
3	瓦質土器 播鉢	—	(1.8)	器表—暗青灰色(5B4/1) 器肉—灰白色(2.5GY8/1)	良好 1.5mm以下の長石含む	良好	
4	陶器 小皿	*3.8	(1.1)	素地—赤褐色(10R4/3) 釉—極暗赤褐色(10R2/2)	精良 砂粒ほとんど含まない	良好	回転糸切り
B地点の畑地採集(Fig.62)							
5	瓦質土器 播鉢か鍋	—	(2.2)	器表—暗灰色(N 3/0) 器肉—ぶい黄褐色(10YR7/2)	良好 2mm以下の長石かなり含む	良好	
6	瓦質土器 播鉢か鍋	—	(2.4)	器表—暗青灰色(5B3/1) 器肉—灰白色(10Y8/1)	良好 3mm以下の石英・長石含む	良好	
7	瓦質土器 甕	—	(2.5)	器表—青灰色(10BG6/1) 器肉—灰白色(5Y8/2)	良好 2mm以下の砂粒若干含む	きわめて良好	
8	瓦質土器 播鉢	—	(1.5)	器表—灰色(N 4/0) 器肉—灰白色(10Y8/1)	精良 1mm以下の砂粒わずかに含む	きわめて良好	
9	磁器 碗	—	(2.0)	素地—灰白色(7.5Y8/2) 釉—明オリブ灰色(5GY7/1)	精良 砂粒含まない	良好	細かい貫入あり
10	瓦質土器 鍋	—	(2.3)	外面—淡褐色(5YR8/3) 内面—灰白色(10YR8/2)	やや不良 1mm以下の長石等含む	良好	
11	土師質土器 鼎	—	(4.0)	橙色(2.5YR7/6)	良好 1mm以下の石英・長石若干含む	良好	二次加熱による赤変著しい
12	土師質土器 鼎	—	(4.6)	灰白色(10YR8/2)	やや粗 1.5mm以下の石英・長石若干含む	良好	部分的に二次加熱による赤変
13	土師質土器 鼎	—	(4.3)	淡褐色(5YR8/4)	良好 1mm以下の砂粒若干含む	良好	部分的に二次加熱による赤変
B地点の畑地採集(Fig.63)							
No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
1	石器剥片	3.4	1.8	1.2	6.1	黒曜石(姫島産)	
2	石器剥片	1.5	1.7	0.7	1.5	石英(水晶)	